

特別支援教育の専門性を高める教員の
育成と都情研の役割

東京都立学校情緒障害教育研究会会長
墨田区立業平小学校長 伊藤 康次



令和4年4月19日(火)、調布市グリーンホールにて、「令和4年度東京都立学校情緒障害教育研究会 定期総会・記念講演会」が開催され、全都より800名を超える多くの会員の先生方にお集まりいただきました。その席上、昨年度に引き続き本学会会長の「承認をいただき、令和4年度の役員組織や活動計画等が決定されました。」

また、定期総会後の記念講演では、北海道大学大学院 教育学研究院 附属子ども発達臨床センター准教授 岡田 智 先生を講師としてお招きし、「発達障害の社会性指導はいかにあるべきか」オーダメイドとパッケージ化」という演題でご講演いただきました。会場を埋め尽くすほどの多くの先生方の姿に、自らの専門性の向上への熱い意欲と本会への期待を感じ、会長として身の引き締まる思いです。

今年度は、3年ぶりに夏季研究会を開催する予定です。特別支援教室及び自閉症・情緒障害学級に関わる先生方の専門性の向上を図る研修と合わせて、日々の実践を持ち寄り、協議し、より一層の指導の充実と東京都全体の特別支援教室及び自閉症・情緒障害学級における授業の質的向上をめざしてまいります。皆様のご協力のほど、よろしくお願いたします。

◆教員の専門性を高めるための都情研の役割

令和4年3月、東京都教育委員会より「東京都特別支援教育推進計画(第二期)第二次実施計画」(以下、実施計画と略)が策定され、公表されました。

「実施計画」の冒頭では、「今後は全ての学びの場において、子供一人一人の違いを個性として受け止め

ながら、障害による困難さのために支援を必要とする子供たちへの指導・支援を充実」させることが重要であると述べられており、4つの「施策の方向性」が示されました。特に、「施策の方向性Ⅳ」では、特別支援教育を推進する体制の充実として、「教員の専門性向上」を掲げており、その将来像として、「特別支援教育に対する意欲に満ちあふれ、教科や自立活動の指導に精通した専門性の高い教員が多数育成」されていると設定されています。

このことはまさに、本会がこれまで大切に受け継いできた理念であり、本会の目的である「情緒障害教育の拡充発展及び特別支援教育の振興」を達成するために行ってきた営みでもあると考えています。

「実施計画」の「第2部 第IV章」には、「研究推進団体」への支援事業についてまとめられています。その中に「団体に所属する教員の自主的な研究活動の活性化は、教員の指導力の向上や特別支援教育の充実」につながる」と示されています。

改めて、東京都全体における特別支援教育の充実・発展のために本会の果たすべき役割の重さを感じております。

◆発信力のある都情研

私はこれまで特別支援教室拠点校の校長として勤務してきましたが、4月の異動で巡回校に着任いたしました。

巡回校の校長となつて一番感じたことは、特別支援教室に関する「情報量」の少なさです。児童の様子や指導の実際はもちろんのこと、巡回担当の先生方との日常的なコミュニケーションも限られてしまいました。

そして、巡回校における通常の学級の先生方と巡回指導担当の先生方とのコミュニケーションは十分に図られているのだろうかという課題が私の中で湧き上がってきました。

本会が推進している研修内容は、巡回指導教員のみならず、全ての先生方に理解を深めていただき、自校の特別支援教育の充実、支援を必要としている子供たち一人一人を見つめ、支える手がかりにしていた1

だきたいと感じています。そのためにはまず、本学会員の先生方が、本会で学んだことを自校や巡回校に発信し、広めていただき、特別支援教育体制の中核をなすことを期待しております。

1年間の会の運営にあたり、各ブロックの副会長先生、ブロック担当の校長先生、企画運営本部、各ブロック総務や諸係の皆様のお力添えを賜りますよう、よろしくお願いたします。

令和四年度 都情研定期総会記念講演（抄録） 「発達障害の社会性指導はいかにあるべきか」

「オーダーメイドとパッケージ化」

北海道大学大学院教育学研究院
子ども発達臨床研究センター

岡田 智先生

講演は、発達障害の社会性指導について分かりやすくお話ししていただきました。紙面に限りがあるため、お話のかなりの部分を割愛せざるを得ず、誠に残念です。それでも、とても示唆に富む内容ですので、最後までお読みいただき、今後の指導に生かしていただければと願っています。

（広報担当）

1. 社会性指導とウォーミングアップ
社会性指導を行うときに、最も取られるアプローチはソーシャルスキルトレーニング（SST）です。巷には活動プログラム集や絵カード、ワークブック、ゲーム集など出版され、様々なネタを皆さんも目にする事ができるでしょう。「SST II ゲーム・遊び活動」または、「SST II 絵カードで練習」と誤解されることもあります。認知と行動にかかわる学習理論に基づき、スキルを指導するということがSSTの特徴になります。

通級指導にも当てはまると思いますが、SSTや社会性の指導を行う際に、子どもが学ぶべき課題をどのように設定するか、デリケートな課題でもあり、そしてとても重要な課題でもあります。特別支援教育、その中でも自立活動の指導は、算数や国語のように学習指導要領に具体的に指導内容が設定され、決まりきった教科書があるわけではありません。指導内容を設定する際に先生方が必ず参照するのは、実際の場面で行っている子どもの問題だと思います。在籍級で集団に参加できないとか、こだわってしまいトラブルになるとか、衝動行為が多く周りを困らせているとか、友達と遊ぶうとしなくて孤立しているとか、先生や保護者の視点から捉えられている問題が、支援のスタート地点となっているわけです。つまり、子どもの問題が出发点となり、指導が開始されると思います。そのため、通級指導や社会性指導というものは、子どもの問題や弱点の部分を扱うこととなりますので、当然、それ

を認識する子ども自身も緊張をばらみず。社会性にまつわる課題は、子どもの自尊心を低めてしまうトピックです。指導内容や目標が自己価値にかかわる内容になりがちです。社会性指導はそのような子どもの自己価値にかかわる内容を扱いますので、子どもと先生の間に緊張感がはらみずし、そのうえ、このような学びは子どもにはしんどい場合も多く、通級指導への動機づけの問題に直結することもあるでしょう。

そのため、指導の際には、導入部分がとても大事になります。従来のSSTでも活動の導入部分でウォーミングアップを入れていきます。一回一回のセッションでは、いきなり課題、難題、問題に直面化せず、ウォーミングアップ活動を取り入れます。

今日、私の場合、今この時、昔から都情研を牽引してきておられる先生たちや、千人前後の先生方を前にしていますので、すごく緊張しています。ちよつとウォーミングアップ活動してみたいのですが、実際に小学校低学年で行っているものをやってみましょう。（この後、ワークが入り、ウォーミングアップのねらいや指導に活用する際のポイントなどの説明がありました）。

自立活動やソーシャルスキルにかかわる学びは 子ども自身の自己価値にかかわる問題である。

【教える側からすれば】

- ・社会性に関する課題は、多くが暗黙（ヒドゥンカリキュラム、教科書・テキストがない）
- ・社会性を自然に学びにくい。
- ・指導内容は、子どもの問題が起点（失敗や問題が支援の入り口）
- ・他者との関係の中で、自己概念、自己価値、自己理解が育つ
- ・自己肯定感、対人関係や集団参加のあり方に左右されてしまう

【発達障害の観点からは】

- ・スキル知識があってもスキルを運用しにくい（分かっているが、うまくできない）
- ・定型発達の子よりも、人生の早いうちに、自身の苦手さや問題点にさらされる
- ・他者が否定的、不快、脅かす存在になっていく（回避対象になる）
- ・防衛するために武装する（攻撃性）
- ・防衛するためにカモフラージュする（普通への固着と過剰な適応戦略）
- ・バーンアウト

2. 自己理解と動機づけ支援

社会性指導では、緊張をほぐし、信頼関係を築くといったかかわりだけでなく、自己理解や動機づけの支援も重要視されています。発達支援や通級指導にやってくる子どもたちは、基本的に問題があるから連れてこられるということがほとんどです。自ら相談したい、自分の苦手を改善したいとやってくる子どもたちはほとんどいません。子どもたちの自尊心を守るために、子どもの問題や困難には触れずに、ただ受け入れて、ゲームをやって終わり、といった通級指導も時折見受けられますが、勘の良い子ども達は、自分

の問題を矯正しようとしている大人の裏の意図に気づき、通級を拒否してしまうといったこともしばしば起こるでしょう。このようなこともあるので、情緒障害教育の先達たちは、必ず、子どもと通級指導のことについて話し合い、通級の目的と

自身が学ぶべきことを共有します。医学で言うインフォームドコンセントという関わりです。入級したばかりの子どもは多くは、自分の学ぶべき課題を言語化できませんが、適切な指導や活動が展開されれば、先生と目標を共有し、一緒に学びを展


開していきます。このようなかわりがないがしろになると、多くの子どもは高学年や中学生になると、たくさん学ぶべき課題はあるのに、通級や特別支援教育を拒否してしまっています。また、課題を意識せずしてしまったり、反対に子どもと課題を共有できずに腫れ物に触る扱いをしたりしても、大人への不信感と支援への拒否感のみが増幅してしまい、二次的な問題を生じさせてしまうでしょう。丁寧な「動機づけと自己理解の支援」が望まれます。

3. ワークブックや絵カードだけの指導で学べるのか？

さて、SSTについて現場で行われていることは、市販のワークブックや絵カードを使った勉強です。例えば、並んでいるところに横入りした場面の絵カードを例にして話をしましょう。横入りの子の前は、どんな表情をしているでしょうか。後ろの子はどんな表情をしていますか。これは表情認識のトレーニングになるのかと思います。また、横入りした子はどうすればいいかと尋ねれば、「列があいていたら、並んだ」などと答えれば間違った知識をもっていることを把握できるかもしれません。そして、「後ろに並ぶ」「前をあけている人を注意してはいけない」などと知識を伝授できるかもしれません。横入りしたらどういふことになってしまいかと問えば、結果予測のプランニング

の学習になるでしょう。A D H D 傾向の子は結果を予測しないで行動してしまうので、結果を一つ一つ考えることが指導になるかもしれません。この絵カードで描かれている場面について、後ろに並ぶとか、うっかり横入りしてしまったり「ごめんなさい」と言うとかを練習することで、行動形成と自己効力感を高められるかもしれません。

絵カードでソーシャルスキルトレーニング的な勉強？ (括弧はねらいっぽいもの)



- ・どんな表情をしていますか (表情認識、社会的参照)
- ・どうしたらよいですか (ソーシャルスキル知識)
- ・どうなっちゃいますか (結果予測、プランニング)
- ・どうすべきですか (道徳、責任、自己選択)
- ・うまくやれそうですか (自己効力感)
- ・このようなことありませんか (自己理解)
- ・どんな気持ちですか (心の理論、他者理解)

しかし、指導場面でこの絵カードを子どもと見て、一緒に学習して本当に効果があるのかどうか。理論上は、表情認識や心の理論、ソーシャルスキル知識、結果予測とプランニング、責任と自己選択、自己効力感などの指導を行っているように思

どのように教えるのか 社会性指導とは (1)

■ 負のスパイラル

- うまくかかわれない (スキルの未熟さ)
- 自己効力感 (スキル発揮への自信) の低下
 - ネガティブな環境との相互作用, もしくは回避
 - 情緒の問題, スキル学習の機会の軽減
 - うまくかかわれない (スキルの未熟さ)

■ 学びのスパイラル

- できる範囲で無理なく社会 (他者や集団) とかかわる
- 社会的動機の高まり (関わりたい)
 - スキル学習の機会が増える
 - スキル学習への動機づけが高まる
 - スキル学習
 - 環境との相互作用
 - 社会的動機の高まり



えませんが、果たして効果があるのでしようか。実際には、このようないろいろなやり方や教材があります。が、これらをどう使うかということが我々の指導上の課題になります。ちよつと察しがいい子や自我が強い子は、こうした絵カードを見せられたら、どうせ自分がこういう課題があるから見せられていくんだと思つて反発して、取り組まないでしょう。自閉症スペクトラム障害(ASD)のある子どもでも受け身の子は、素直に取り組むかもしれませんが、頭では分かっているけど実際に日常の場で実践できるかどうかは難しいかもしれません。ASDの汎化困難性(応用できない、指導場面以外で展開できない)は非常に重要な問題で、絵カードやワークブックなどの机上課題だけで指導しますと、頭でつかちの状況を作り出す指導になってしまいます。教材を作らなくてよいので、市販の絵カードとかワークブックとかを利用するのは、多忙な先生方にとっては楽なのでよいと思いますが、指導効果、指導の効率性の面からは、どうなのか考えなければなりませんね。私たちが出版したSSTに関する書籍も、同じかもしれません。面白そうな活動ネタが掲載されているからと言って、それをただむやみに目の前の子ども達に適用しても、それはうまくいきません。子ども達の一人ひとりの学ぶべき課題を把握し、この状況に応じて、活動を取り入れたり、



指導内容や目標を設定したり、子どもたちの反応を見て柔軟に指導を変更していったり、そのようなオーダーメイド支援が望まれますし、目の前の子どもとのかかわりの中で指導を組み立てていくといった「我々の学び」が望まれています。

4. 特別支援教室での社会性指導は逆効果になる場合があるかもしれない

私は、大都市圏の公立学校の通級指導教室の先生方に協力してもらつて、一年間指導効果を調べる研究をしました。この調査は、日ごろ通級での社会性指導について勉強会をしたり、実践を共有したりしているメンバーで、何冊かSSTアプリと活動ネタについて書籍も出しています。そのため、活動ネタだけでなく、自己理解や動機づけ支援スキルの指導方法などのSST方法についても多くの部分を共有しています。具体的な内容は「特別支援教育をサポートするソーシャルスキルトレーニング実践教材集」をご覧ください。

この調査に際して、児童本人が自分の学ぶべき課題や目標を言語化できたか、自己理解が高いかどうかをまず判断しました。通級担当の教員に、通級指導の中で一度でも言語化できたら自己理解が「中(程度)」、言語化できなかったら自己理解が「低い」、一年間の中で二回以上言語化できたら自己理解が「高い」と先生方に評価してもらいました。そして、学ぶべき課題を自己理解できているかの観点で児童を低・中・高の三群に分けました。また、週あたりの通級時間の点でも分けました。週一時間以下の短時間群と、二〜四時間の中間群、一日丸々の五時間以上の長時間群に分けました。

調査の結果を見ると、自己理解が低くても長時間通級だと、集団行動やセルフコントロールにおいて結果が上がりました。でも、自己理解が低くて短時間通級の子は、逆効果、つまり数値が下がりました。これは、すべて通級の先生の評価ではなく、在籍学級担任の先生の評価です。短時間通級の子でも学ぶべき課題を理解できていない子どもは、一年間の通級指導を行うことで、在籍学級で行動がより荒れたり、問題をもよほすようになったりしたかもしれませんということ。社会性の指導をどのように行うか考えたときに、通級時間というものには結構大きいかもしれないのです。この共同研究に協力してくださった先生方は皆ベテランで、地域ではリーダー

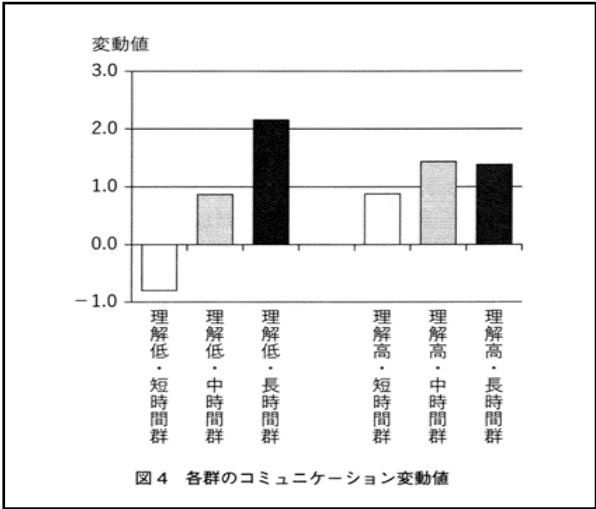
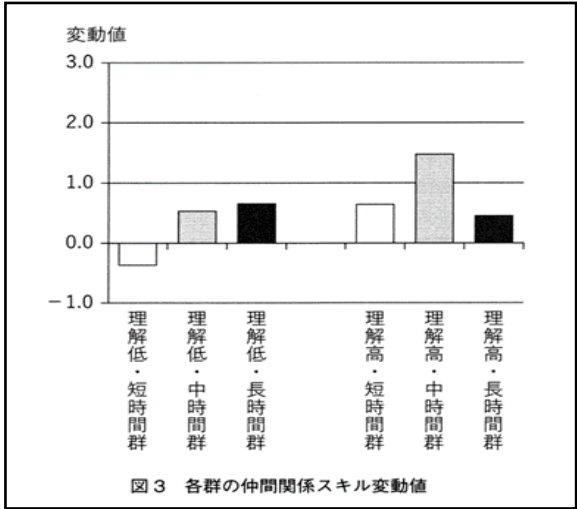
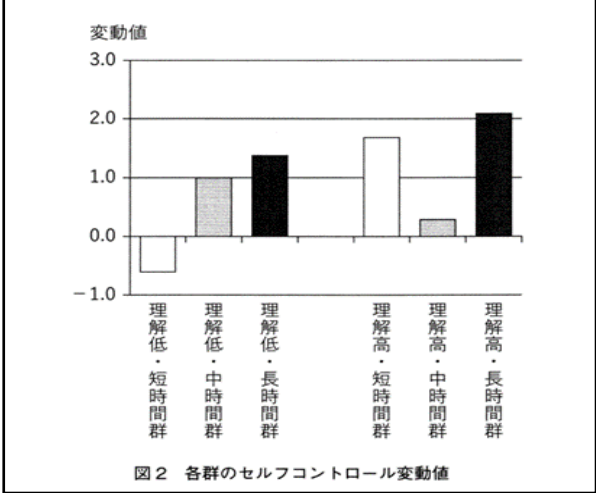
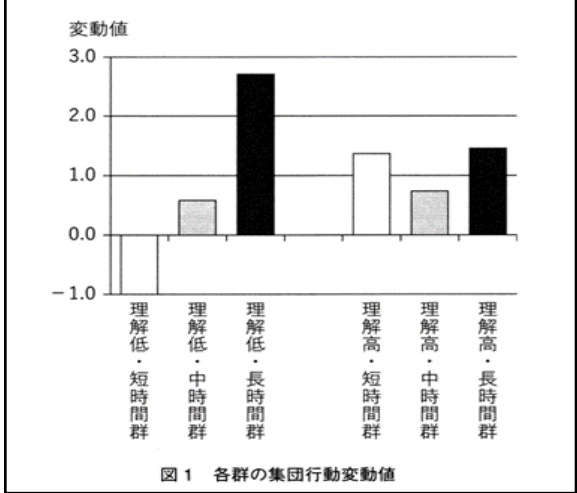
的存在の先生方です。短時間通級でも長時間通級でも、指導の質はともいいものです。それでも、自己理解が低くて短時間通級の子についてはマイナスな結果が出たという事です。ただ、自己理解があまりできていない子でも長時間通級だと、結果が上がっています。それは長い時間をかけて、子どもと寄り添いながら課題を扱えるということの結果かもしれません。

調査結果から垣間見える課題として、やはり通級時間、どのくらいの時間を過ごすかです。つまり量です。質はもちろん問題にしなればなりません。量も重要です。通級時間数も問題にしてしっかりと検討しないといけないと思います。

4 今回の調査で協力してくださった先生方は、入級するときに「君の課題こういうことだね」「こういうことを一緒に学ぼうぜ」というようなことを共有しており、あと子どもが「行きたくない」とか「嫌だ」と言ったときに、しっかりと本人と通級目的や自身の学ぶべき課題を振り返り、共有して話し合うことをしています。それは医療ではインフォームドコンセントと言います。きちんとインフォームド、つまり情報を伝えて、「通級とか支援教室でこういうことをやるんだよ」「君はこういうことが必要だから、こういうことを先生たちは手助けをできるよ」などの話をします。そして、「どうやってみる？」のように子ども

に聞いてみることで。コンセント、つまり同意をきちんととるといふこともしています。そこができるかできないか、だいたい先生方の苦労が違います。通級目的や先生たちができること（手助けする内容）を、子どもが具体的に自身の苦労や経験に照らし合わせて捉えられていると、子どもの中に葛藤や抵抗感や疑いが生じたときに、その都度、丁寧に話し合うことができます。自己理解と動機づけの支援がなければ、特別支援といった子どもは差し伸べられた手も侵襲的にとらえてしまい、子どもの心の中では傷つき体験として経験してしまうかもしれません。

二次障害が強い場合は、そこを直面化し過ぎると子どもの心を揺さぶってしまうので、状態を悪くする場合もある。このさじ加減も調整しながら、時間をかけながら自己理解の指導を行います。例えば、通級が半日とか一日だったら、その生活の中でいろいろ話す機会もあるし、ネガティブなことだけでなく、ポジティブなこともあるし、バランスもとりたいのかもしれない。課題と向き合うしんどい時間だけでなく、先生と楽しんだりほっとしたりする「ゆるい」関わりも展開できることでしょう。動機付けとか自己理解の指導を時間をかけて、学校生活の中で展開していくことの意味を、この調査データからは読み取れました。



岡田・山下・岡田・森村・中村(2020)発達障害を対象にした通級指導教室におけるソーシャルスキルトレーニングの効果の検討：学ばべき課題の自己理解、通級時間数に焦点を当てて

5. 社会性指導とは—どのように教えるか

教える側からすれば、社会性指導は何を教えるのか具体的に示されていないのが大きな課題です。国語、算数のように教科書、テキストがありませんが、学習指導要領にも自立活動として書いてあるけど、すごく漠然としています。いろいろな書籍があつて解説もされていますけど、何を学ぶかは子どもによって違うわけです。そして、子どもの問題が何を学ぶかの出発点になることが多いので、子どもの自己価値に関わることを扱うことにもなります。子ども自身が緊張をはらみずし、支援すればするほど、子どもにとっては否定的な経験をすることが可能性も高いです。また、発達障害の観点からすると、特に自閉症スペクトラムの子たちはきちんと教えないと、学びにくい特徴を持っています。一個一個のスキルは知識としてちゃんと学ぶのだけど、それが日常の中でつながっていかない。少し状況が変われば、混乱してしまうし、学んだ知識は生かされないということがよく起きがちです。だから、一個一個丁寧に教えていく必要があるし、もし絵カードやワークブックを使つたとしても、学んだことは子どもの日常生活のなかに繋げて扱っていかないといけないということです。汎化困難、これがなかなか大きな問題です。

インフォームドコンセント

- ・医療法第一条の四「インフォームドコンセント(説明と同意)」
- ・「医師、歯科医師、薬剤師、看護師その他の医療の担い手は、医療を提供するに当たり、適切な説明を行い、医療を受ける者の理解を得るよう努めなければならない」
- ・医療行為や心理臨床行為は、侵襲性(害を及ぼす)可能性が高い

特別支援教育は善意で行われているものだから、侵襲的ではない？
障害のある子どもは同意能力がない？
特別支援は多額な予算が特別に使われるからユーザーに知る権利や選択の権利はない？

インフォームドコンセントは、知る権利、自己選択をする権利を保障する行為にとどまらず、自己理解と自身の主体を取り戻す重要な支援の機会となる。

どのように教えるのか 社会性指導とは (2)

- ・動機付けの指導
インフォームドアセント、ラポール形成、仲間関係づくり、寄り添う、主体への侵襲への配慮
- ・スキル形成の指導
認知・行動理論のテクニック、障害特性に応じた指導
- ・スキル実践の指導
コーチング、ホームワーク、支援者間の連携
- ・成功体験を捉え、共有する指導
子どもに届くフィードバック(具体性、有用性、即時性、肯定性)
本人・家族主体の情報共有、支援者間連携

もう一つの問題は、子どもたちがより早期に自分の問題点に直面させられるということ。早いうちに自分のネガティブな部分の自己理解を迫られてしまうということ。自分はこのなところ苦手だとか、ここがうまくいってないとか、中学生の子どもでさえ、自分のマイナスの面に向き合うのは結構きついです。我々もそうですね。自己理解の指導は、子どもたちにネガティブな側面と直面化することを求めることになり。どういふふうには先生と子どもで共有するかというのは大きなポイントで、やはり寄り添うようにとか、一緒に伴走するよきな形で付き合えればいいのですけど、どんどん、子どもの心に攻めていってしまうこともしばしば起こります。そこも発達障害の子どもの支援の難しいところです。だんだ

んと対人不安、不自信、不快感をもち、そのうち他者が否定的、不快な存在になっていきます。それで、回避、引きこもりになるかもしれない。問題は起きないけど、本人だけが苦しくなる状況、家族が苦しくなる状況もあります。また、防衛するためには武装するということもあります。「あなたは問題児だ」と言われて、問題児ラベルが貼られた子どもは、その負の烙印のおかげで、自身の認識もネガティブになりますし、周りの子ども達や大人たちの認識もさらに固定的でネガティブなものになっていきます。

最近、問題がよく指摘されているのは「カモフラージュ」という問題です。知的障害のお子さんは、分からない場面に晒されると、何でも「分かった」と、とりあえず言ってしまう子が多いのを経験します。過剰に取り繕うということをし。自閉症スペクトラムの方も、普通への固着というか、自分の欠点とか苦手な部分を過剰に隠そうとするという、そういうカモフラージュ戦略をとるようになってきます。それらを「特別支援教育」や「先生たちの良かれと思ってやっている関わり」が増長させてしまう場合があります。そこも気を付けないといけないところ。カモフラージュや過剰な対応は本当に疲れますし、心身ともに子どもと家族を疲弊させます。表面上問題がないように見えても、メンタルヘルスの重大な問題を水面

下で生じさせている場合もあります。学校や家庭、世の中を問題とする前に、そして子どもの障害を問題にする前に、我々の指導とか支援とか、我々の在り方を問題にしていけないといけません。我々の支援行為そのもののリスク(副反応や逆効果)も認識しつつ、どうやって指導、支援を始めるのか、続けるのか、その熟練が必要になります。また、先ほどお伝えしたインフォームドコンセントの観点とか、子どもの動機付け、あと自己理解、自己選択をどう支えていくのか。われわれのあり方やわれわれの専門職業人としてのキャリア形成に目を向けなければなりません。

6. パッケージ化された SST-IP EERS®

オーダーメイドの SST というのは、アセスメントなど、支援者の力量が必要となってくるものです。技や労力が必要となってきます。一回の指導を入れるのに、準備や振り返り、先生たちとの共有も含めて時間がかかり。効果を発揮できるのは、個別と小集団を組み合わせることだということが分かっています。

一方で、パッケージ化された SST として、「PEERS®」というプログラムが米国では取り上げられています。学校に導入しやすいというのと、パッケージ化された、発達障害に特化した内容のプログラム

です。子どもと家族と契約を結び、一定期間集中的に取り組むプログラムになっていきます。保護者のセッションもあって、子どもにも宿題が課され、汎化の問題にも十分対応したのになっていきます。UCCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）で展開され、十四週にわたって毎週九十分行われるプログラムです。認知行動療法と自閉症スペクトラムに特化したアプローチの組み合わせで、二名の指導者がいれられるプログラムです。日常生活でのスキル実践、現実社会での友達づくりを目標にしています。それは、グループ活動の中でお友達をつくるといったフレンドマッチンググループではなく、自身の実際の日常生活の中で、自分の居場所や友達ができるだろうグループを見つけたら、日常の中で自分にとってよい友達を選択し、維持したりすることができるよう、小集団で学ぶトレーニングプログラムになっています。

特別支援教育はこのニーズに沿って展開されるオーダーメイド支援が基本になっています。しかし、特別支援教室や通級指導のように、現在、部分的な支援が急速に拡大し、手軽に受けられるようになった分だけ、熟練の先生方によるオーダーメイド支援は行きわたらず、専門性の低下が指摘されるようになってきました。パッケージ化されたプログラムはある程度の訓練を受けたたり、研修会でライセンスを取得したりすれば実施できるのですが、数十年と蓄積された広範囲の発達をカバーする情緒障害教育の方法論はそうたやすくパッケージ化は難しいと思います。一方、社会的コミュニケーションや相互交渉スキルの獲得と汎化に焦点を絞ったプログラムであるPEERS[®]は、ASDへの指導方法が詰まった方法と言えます。これだけで、ASDの広範な問題に答えられるわけではありませんが、日本でもASDのある高学年や中学生への一つのアプローチとなる可能性があると思います。これまで、私はお遊びSSTや絵カード・ロールプレイだけの形だけSSTを批判し、ASDやADHDへのオーダーメイドSSTを展開してきましたが、パッケージ化された手法も試してみようと考えています。今日はそんなPEERS[®]のプログラムを少しだけ紹介させていただきます。

7. PEERS[®]のセッションの例

セッションの一例として「会話のスキル(情報交換)」のテーマのセッションを紹介します。「今日は情報交換ということを学びます」とテーマを毎回かけて始めます。「人とおしゃべりをしたりコミュニケーションをとったりする時は、情報交換が大事なんだよ。会話って情報交換なんだよ」などと教示して具体的なポイントを教え、ロールプレイを提示して、リハーサルをし、宿題を

やって、アクティビティというワークをやって、最後に保護者との合同セッションをして、一回のセッションは終わりです。一つ一つスキルを具体化していくというのが大きなポイントです。

では、ここで先生方とやってみましょう。会話の様子をビデオで観てもらいたいと思います。先生同士がロールプレイングをすると本当はいいのではないかと思います。ビデオの中の会話は、情報交換がうまくいっているか皆さん吟味してください。

(ビデオ放映)

(A) 「どう？調子？」

(B) 「ああ、最近、ちよつと外出できていないんだよね」

(A) 「あ、そうなんだ。俺さあ、釣り行って来たよ。この前さ。釣りに行って、岩魚釣って来たんだよ。蝦夷岩魚って三十センチくらいの大きなやつでさ……」

(B) 「うーん……」

(A) 「あの、岩魚ってさ、燻製にしたんだよ。そうしたら鮭みたいな味になって。でも家族は喜ばなくて、喜んだのは猫だけだったんだよね。燻製の作り方、今度教えようか？」

(B) 「あああ……」

(A) 「燻製ソミュール液とか作るのね。ワインとかローリエ、家にある？」

(B) 「あああ……」

さあ、何が問題だったでしょうか。子どもたちの意見を聞きます。「あと、相手が話し終わったら、自分のことを話すんだよね」「相手が話そうとしているのに、被せてきた」と指摘することもあるかもしれません。また、岩魚についてどうでもいいことを言っていたとか。子どもたちの意見を板書し、取り上げます。そして、情報交換のポイントを丁寧に教示します。その後、「じゃあ、次は行動リハーサル、練習だ」ということで、隣に座っているメンバーと趣味などについて情報交換をしてみます。その後、家に帰って実際の友達に電話で連絡を取り、情報交換をしてみます。保護者は親セッションで子どもへのコーチングと宿題を行う手伝いをします。

このように十四回(十四のテーマ)取り組みます。認知・行動理論に基づいた指導方法を行いますので、先生方もそれなりのトレーニングが必要になります。また、毎回のセッションに参加する必要があるのですが、在籍学級などの時間割などよりも、プログラムが優先されます。そのため、現在の特別支援教室で実践できるかという課題はあります。しかし、効果的な指導。パッケージは、やはりきちんと継続して実践していくことが必要になってくると思うと、本人や保護者だけでなく、在籍学校側にも理解を求めていくことが必要になります。特別支援教育や児童デイサービスが単なる託児所で終わ

らないためにも、システム上の工夫が必要で、私のかかわりの深い旧通級指導学級の先生方は、皆さん、地域の学校や先生たちに、通級の役割を認識してもらっており、子どもの発達を担う場として周りから重要視されていました。日頃、在籍級との連携や一般の先生方への相談などにも十分応えながら、作り上げたものだと思います。そのような状況を区市町村や学校単位で作りに上げることができるなら、こういったパッケージ化された方法も導入しやすいことと思います。

8. まとめ

支援者、教師の方の課題として、キャリアパスが見えにくいということがあります。それは実は心理の世界も同じです。心理士は一人職場が多いです。検査だけやって終わりとか、家庭訪問だけやって終わりといった部分的にしか役割を担わせてもらえないことが多くあります。どうやって我々は学んでいくのか、がとても重要になってきています。やはり一番は、子どもや親など目の前の相手からきちんと学ぶということでしょう。そして、仲間や先輩と一緒に学ぶということも大事です。でも先生方は、東京都でも都情研で千二百人以上仲間がいるわけですね。また、チームアプローチをとることが多いと思いますので、仲間や先達から学ぶという状況をつくることはそれほど難しいことで

はないと思います。

そして、何を学ぶかです。パッケージ化された指導アプローチが研究上のエビデンスがたくさん上がっているとはいえず、一般論だけでは子どもの指導はできません。子どもの障害特性や指導ニーズは一人一人違います。パッケージ化された中でも、個に応じて優先的なねらいは違ってくるし、どこまでスキル形成をするか要求水準も異なります。そのため、われわれは子どもの実態把握の力を身に付けていかなければなりません。夏にもう一度話す機会がありますので、そこで具体的なことを扱っていきたいと思います。本日はありがとうございました。

全国情緒障害教育研究会(案内)

全国情緒障害教育研究会は、昭和四十三年五月一八日の創立総会に始まり現在に至っています。

この会は、情緒障害児の教育研究および福祉の増進を図ること、全国的情緒障害数百団体の相互の連携をはかることを目的としています。

さて、第五十四回全国情緒障害教育研究協議会沖繩大会についてご案内させていただきます。

【期日】令和4年8月4日(木)5日(金)

【会場】那覇文化劇場なはーと
【大会テーマ】「子どもたちの未来へつなぐ指導・支援の在り方を

考える子どもたち一人一人に寄り添った学校教育と放課後支援を
目指して」

【参加費】記念講演会二〇〇〇円
各分科会一五〇〇円

【申し込み】感染症対策のため、当日券はありません。詳細・申し込みは以下よりどうぞ。

*



最新情報はブラウザで「全情研」と検索してください。大会への多くのご参加をお待ちしております。

(事務局長 植草葉月)

第七回都情研夏季研究大会

(北ブロック大会)

日時…令和4年7月22日(金)

9時45分～16時25分

会場…練馬文化センター大ホール
(練馬駅下車徒歩1分)

内容…指導実践発表・記念講演

講師…岡田 智 先生

(北海道大学大学院教育学研究
院附属子ども発達臨床
センター准教授)

※記念講演

講師…岡田 智 先生

演題…「自閉症スペクトラムのある
子どもへの効果的な社会性
指導を考える」

今年度の夏季研究大会は、3年

ぶりに夏季休業中の全日を使って開催いたします。4月の定期総会に引き続き、講師に北海道大学大学院の岡田智先生をお招きし、「特別支援教室の指導のあり方について考える」実態に応じた指導内容とは」をテーマに研究を深めてまいります。

午前中は、運営担当の北ブロックを除く4地区の指導実践発表を行い、講師の岡田先生に指導助言をしていただきます。午後は、岡田先生のお話をたっぷり伺う予定です。

なお、詳細はホームページにてご確認の上、必ず事前申し込みを
してご参加ください。

編集後記

広報に関するご意見、ご感想がありましたら左記までお寄せください。

編集・発行 企画運営本部広報担当

各ブロック 広報係

世田谷区立中里小学校

(廣田智仁)

☎03・3422・7775